

# 「さあ、みんなで、考えよう」

## 今年は「国際識字年」から30年

### 「国際識字年」とは？

「2000年までにすべての人々に文字を」というスローガンのもと、国際連合は1990年を「国際識字年」と定め、ユネスコを中心として長期的な取り組みをはじめました。文字の読み書きや計算ができない「非識字者」は、1990年段階のユネスコの統計によると、世界では約9億6千万人(15歳以上の4人に1人)の非識字者が存在し、そのうちの3分の2が女性であるといわれていました。また、就学年齢に達したにもかかわらず、就学していない子どもたちが1億人以上いると推定されていました。

2015年段階では、「EFAグローバルモニタリングレポート2015、ユネスコ」によると、世界には約7億8100万人の成人非識字者(15歳以上)がいます。

また、2018年段階(UNESCO UIS Factsheet No.48 2018年)では、世界には、貧困や紛争、学校が近くにないなど、さまざまな理由で学校に行けない子ども(6~14歳)が約1億2400万人(うち初等教育では約6100万人)、さらに教育を受ける機会がないまま大人になったために、文字の読み書きができない人が約7億5000万人(世界の15歳以上の6人に1人)いるとされています。

### ○世界の識字率と識字率が低い背景

世界を見てみると、アフリカの識字率が全体的に低く、比較的識字率の高いアジアの中では、アフガニスタンはとても低くなっています。文字の読み書きができないことで、得られる情報が不足し、社会的な権利が大幅に制約されてしまいます。

識字率が低い背景には、貧困や差別、紛争や戦争などの理由により、学校に通うべき年齢で教育を受けられないことが挙げられます。また、男子の教育に力を入れる傾向により、女性用トイレがない学校や女の子は勉強する必要がないと考える地域もあります。交通手段がない遠方に住む子どもたちが学校に通うことができない現状もあります。学校へ通えたとしても、公用語で学校の授業が行われているため、独自の言語や文化を持つ少数民族の子どもたちの多くは授業についていけなかったり、少数民族の言葉を話せる先生が不足している現状もあります。

# ○SDGsと「生きる」「生活をとりもどす」識字

2015年に国連総会で採択されたSDGs（Sustainable Development Goals：持続可能な開発目標）では、識字の重要性が強調されています。SDGsの教育分野目標「質の高い教育をみんなに」には、「2030年までに、すべての青年と大多数の成人が男性も女性も含めて、識字と簡単な計算ができるようにする」という目標が定められています。読み書きができることは「生きる」ことの大切な土台となります。「生きる」権利、「心豊かに暮らす」権利を意識した識字の取り組みは大切です。

## 今年は「しらすぎ識字学級」開校から30年

### 2016年度第4回いがまち人権センター解放講座[2017年2月17日]配布資料より抜粋

「字が読めんで新聞はいらん。大きな病院へかかりとうても行けへんわ。いろんなこと書かなんしな。行きとうても行かれへん。ほんま情けないし、はがゆいわ。」等の声に、非識字というのは、人間らしい生活を営む権利を奪ってしまう重大な人権侵害ではないかと思った女性部を中心に、識字学級開設にむけた取り組みがはじまりました。そして1990年7月18日に「しらすぎ識字学級」が開校しました。午後7時30分から毎週木曜日にいがまち人権センターで行われて、26年(2016年度解放講座実施当時)続いています。近年は識字学級生の高齢化により、夜の学級へは出にくくなっていることから、2009年度4月より、夜の識字学級に加えて新たに昼の部を開設しました。現在(2016年度解放講座当時)、学級生は22名が在籍しています。

**「わたしと識字」** わたしが識字とならおうと思った事は、新聞が読めないのと医者に行っても文字がかけずに困ったからです。孫が学校に入ったら字をおしえてやりたいと思うからです。識字をしてきてよかったことは、何も知らない私に手を取るように教えて下さいましたので、初めて年賀状を出せるようになりました。今までは、病院へ行くのにもうらの人について行ってもらったが、今では一人で行く事ができます。家でも、お祝いのふくろと嫁に書いてもらっていたが、いっぺん自分で書いてみるわと書いて書いたのを見て、お母さん上手やなと言ってほめてくれました。これから識字でしていきたい事は、友達に手紙を出せるようになりたいです。（1992年発行の第1号文集「しらすぎ」より）

**「1992年発行の第1号文集「しらすぎ」の巻頭のことば** 「識字の場は文字を奪い返す場だといわれていますが、人間の生き方を奪い返す場であり、文字を学ぶよりも、人と人のつながり、人間と人間との関係性を奪い返す場であろうという意味で、両方からの解放という大きな意味も持っている」といわれます。文字を奪い返そうと、熱い願いをにぎりしめ、毎週木曜日夜七時半、文化センターの識字学級へ、大勢の人たちが集まってきました。人に言っても仕方ない、人に知られたら恥ずかしいと、心の奥にしまい続けたことを、ゆさぶり、照らし、掘り出すために、一字一字に思いを込めて刻みます。「こんなはがゆいこと」「あんな苦しいこと」「ほんに嬉しかったこと」をみんなで綴って、開校二年目、ここに文集「しらすぎ」の創刊号ができあがりました。長い間、しまい込まれた魂は、それを綴る人だけでなく、それに触れる多くの人にも反差別の生き方を教えてくれます。